第１章　座談会及びコラム

1．座 談 会

開催日時：平成17年１月31日（月）午後２時
開催場所：宜野湾市議会第三常任委員会室
出 席 者：石川　仁一氏（第12・13代昭和57年９月30日～昭和63年12月26日）
伊佐　吉秀氏（第14代昭和63年12月26日～平成２年９月27日）
仲村　春信氏（第15代平成２年９月28日～平成６年９月27日）
伊佐　雅仁氏（第16代平成６年９月28日～平成10年９月27日）
天久　嘉栄氏（第18代平成11年５月18日～平成14年９月27日）
伊佐　敏男氏（第19代平成14年10月１日～現在）

司会進行：長嶺　健（議会事務局長）

＝歴代議長が議会を語る＝

司会　長嶺議会事務局長（以下　司会）皆さんこんにちは。本日は、議会史編纂事業の一環として、座談会を開催致しましたところ、公私ともにお忙しい中、ご足労いただきありがとうございました。お揃いになりましたので、早速、座談会を進めさせて頂きたいと思います。

はじめに伊佐敏男議長から開会のあいさつをいただきたいと思います。

伊佐敏男現議長　本日は議会史編纂のための座談会を企画し、ご案内致しましたところ、大変お忙しい中、歴代の宜野湾市議会議長にご出席いただき、心より感謝申し上げます。

議会史の編纂につきましては、戦後55年余の村議会、市議会の歴史を後世に残す必要があるとの認識から、市議会としても長年の懸案事項でありましたが、市当局をはじめ、関係各位の皆様のご配慮、ご協力をいただきま

して、市制施行40周年記念事業として、平成15年１月より手がけてまいっております。
　議会史の編纂事業に当っては、本日ご出席の皆様、叙勲受章者及び議員代表９名の方々の議会在職中における思い出をはじめ、議員名簿、表彰、選挙記録、マスコミ・写真に見る議会活動、さらに昭和23年３月の第１回村議会からの議決一覧表、意見書・決議一覧等々をまとめております。
　55年余りの長い歴史があるだけに、その編纂資料も膨大なものとなりますが、平成17年12月発刊を目指して、議会事務局を挙げて鋭意取り組んでいるところです。
本日は、歴代議長の皆様に、議員時代の思い出や今後の市議会・宜野湾市について、ゆっくり語りあっていただくとともに、貴重なご意見を拝聴したいと思っておりますので、ご協力よろしくお願いいたします。

司会　これより座談会を進めてまいります。議長、議員時代の古きよき時代のいろいろな思い出話、当時の出来事などを忌憚無くお聞かせいただければと思っております。時間の制約もございますのでまず、一人三分程度でお話をお願いします。
　では、石川仁一さんにお願いいたします。石川仁一さんは昭和49年から平成２年９月まで16年にわたり議会活動を通じて市勢発展に貢献されております。二期６年にわたり議長を務められました。歴任中に、全国を一巡する海邦国体の誘致や、運営等にも深く関わっていただきました。長年の議会活動を通じましていろいろな思い出がたくさんあると思いますが、三分程度にまとめて、議会時代の思い出話をよろしくお願いします。

石川仁一氏　特に印象に残っているのは、市民体育館のこけら落としとプロ野球・大洋ホエールズ（現・横浜ベイスターズ）のキャンプ誘致の件です。
　体育館のこけら落としは、県体育協会から「こけら落としのイベントとしてキューバ対全日本選手のバレーボールの試合はどうか」という話があり、市長に話したところ「いいのでは」ということになり、体協へも「やりたい」との返事をしましたところ、外務省からクレームがついたんですね。理由は「キューバは共産国の旗手であり、米軍の基地をみせるのは都合が悪いので中止してくれ」という。私たちは「基地があるために、国際試合ができないのは何たることだ。ぜひ、こけら落としにこの国際試合を宜野湾でやってもらおう。」ということで議会で議決し、要請文をもって10名で東京に出かけたんです。気運として「基地撤去を叫ぼう」という感じでしたので、

国側は基地撤去でマスコミに騒がれては困ると判断したのか、試合は出来ることになり、白熱した試合で、こけら落としとしても盛況でうれしかったですね。

プロ野球・大洋ホエールズ（現・横浜ベイスターズ）のキャンプ地誘致の件は、ひょんなことから話があれよあれよと進みました。地元企業のジミーがありますが、当時、コマーシャルに大洋ホエールズの古葉監督を起用されていた関係で、古葉監督が来沖していました。普天間のとある飲み屋でジミーの社長と桃原正賢市長（当時）と私とで話をしておりました。その席で古葉監督から「宜野湾の野球場でキャンプしたい」との話があり、市長も一緒でしたので「いろんな波及効果が地域にあるはずだ、いいことじゃないか」というので大枠で話が進み、すぐに東京へ電話をしたといういきさつがありましたね。

司会　ありがとうございます。キューバ戦は本当にむし暑い中でやったという記憶が私にもあります。キャンプは、現在も横浜ベイスターズとしてキャンプを行っており、今年で19年目を迎えます。ホテルやその他、いろいろ施設などができ、波及効果もありました。

続きまして、伊佐吉秀さんにお願いいたします。伊佐吉秀さんは、昭和53年から平成２年９月まで12年にわたり議員職を全うし、第14代の議長も務められました。後に県議会議員に転じられ、市勢ならびに県勢発展に尽力・寄与されております。当時を振り返っていただき、思い出話の一端をお聞かせいただきたいと思います。

伊佐吉秀氏　こういう機会をつくってくれてありがとうございます。

14～15年前、私が在職中に宜野湾市は戦後歴代の議長が健在なので座談会をしたいということもあったが実現しなかったので、今回はこうして座談会をもってくれたことをうれしく思います。

市会議員に当選し、初議会のとき、本会議をして、休憩。また、やって休憩でした。議会は非能率的なところだと思って先輩に聞いたところ「調整していくからだ、あわてるな。議会は非能率だが、効率的だ」という話をしてくれたのが印象的でしたね。

また、議長時代は公平・中立と思ってやっていましたが、対立派閥だけでなく、同じ派閥からも意見されることもあり、公平・中立という立場に立つというのは難しいものだと思いました。議長在職中、保守・革新の激しいときがあり、ある意見を取り

消して欲しいということから議論になり、議会がエキサイトして、議員総退場してしまい、補正予算を流してしまったことがありました。思い出すだけでも冷や汗がでます。

司会　そうでしたか、本当にご苦労様でした、貴重なお話をありがとうございます。次に仲村春信さんにお願いいたします。仲村春信さんは、役所勤務を経て、昭和45年に初当選し、一期４年を務められ、自動車学校の経営に専念するために８年間のブランクがあります。昭和57年にふたたび、当選を果たし、平成２年９月まで16年にわたり市勢発展に貢献され、その間に第15代の議長も務められました。平成15年４月には、宜野湾地区防犯協会長に推挙され、現在に至っております。議会時代のエピソードや思い出話をよろしくお願いいたします。

仲村春信氏　議員時代は印象深いですね。宜野湾市には中学校が３校しかなく、中学校増設が検討されていて、土地問題があちらこちらからありました。そのとき、市長は中学校を中原地区にもっていきたいとの意向をもっておりました。しかし、ブローカーに漏れると面倒になる。その前に君たちでどうにかしてくれというので、議員だった私は不動産を手放さないようにと毎晩、地主のところをまわった覚えがあります。また、開校式の時にも、教育委員会と校長が日の丸を掲揚するというので、日の丸掲揚反対の人達が押しかけてきて大変でした。そのような経緯もあり、今は宜野湾中学校を見るたびに感激しています。

また、老人福祉センター建設の件ですが、地主が造成して、宅地にしようとしている土地に公共施設を造りたいとの相談があり、私が中を取り持ち、地主に相談し説得して了解をもらったことがありました。その老人福祉センターが、大いに活用されているのでとてもうれしく思っています。

司会　ありがとうございました。次に伊佐雅仁さんにお願いいたします。伊佐雅仁さんは、昭和45年から平成14年９月まで七期28年の長きにわたり市勢発展に貢献されております。祖国復帰、庁舎移転、し尿処理場問題、公有水面埋め立て、基地問題等幾多の事案と関わってこられ、第16代の議長も務められました。議員として、また議会活動を通じて、楽しかったこと、苦労したこと沢山あると思いますので、お聞かせ願いたいと思います。

伊佐雅仁氏　思い出はありすぎて何を話そうか困りますね。議員に当選したのは、復帰の２年前でした。外から見ていたより、いざ、議員になってみると難儀で、苦しいものだと思いましたね。10時から12時まで着席していて、座ることの苦しさ。また、居眠りするわけにはいかず、家に帰っても大変でした。

当時、埋め立て事業が議論になっていました。埋め立てるとペンペン草がはえてそのままになるというような話でみんな逃げ腰でした。そこへ国場組さんが出てきて埋め立てることへの前向きな提案がなされ、事業が進んでいったいきさつがあります。埋め立てて本当によかったですよ。

ここ２、３年前もありましたが、当時も市町村合併について検討されていました。宜野湾では議決され、後は、中城村、北中城村の議会の議決を待つのみということで、議決に備えてパーティー会場も借りていましたが、午前中にも議決されず、とうとう、夜の10時になっても決まらなかったのでキャンセルした覚えがあります。

それから、鰻の養殖場の件では、市政が変わると言うくらいの大失敗。多額の赤字を出して大変なこともありました。

さらに、政党の垣根を越えて全会一致で普天間基地の返還要請、政府折衝したことが思い出に残りますね。

庁舎移転は、当選２期目のときでしたが、午前中の議会で先輩議員は発言しないんですよね、押し黙ってて。それで副議長に庁舎移転特別委員長を押しつけられて、たいへんな目に遭いました。当時はみんなバスを利用するので旧庁舎はバスの便が良かったんですね。それに比べて新庁舎（現在の庁舎）は、乗り換えの必要がでてくる地区の方が多くなる。それで激励半分、脅迫の電話もかかったりと大騒ぎでした。結局、１カ月半で新庁舎移転を決めました。

司会　ありがとうございました。続きまして、天久嘉栄さんにお願いします。天久嘉栄さんは昭和61年から平成14年９月まで16年にわたり市勢発展に貢献されております。佐喜眞博議長の突然の逝去により、副議長から議長に当選され、第18代の議長も務められました。議長在職中は、普天間飛行場返還問題で議会が二分され、まさに白熱した議会活動が展開された時期でもありました。では、議員として、また、議会活動を通じて、心に残る、刻まれたことを振り返っていただきたいと思います。

天久嘉栄氏　一番の思い出は、普天間飛行場返還問題です、大変な目に遭いましたよ。思い出について二つ、申し上げます。一つは、ＳＡＣＯの合意から３年目の議会でのことです。普天間飛行場の移設に関する決議で、賛成多数になるよう調整したにもかかわらず、採決が15対15の同数になり、議長裁決になりました。原則的には同数だと否決しますが、宜野湾市の将来を考えますと、どうしても基地移設に賛成せねば未来はないと思い、決議しました。それからの１カ月近くは、毎日抗議が殺到し、それに明け暮れる日々を過ごしました。今考えると、ぞっとします。

二つ目は西海岸の開発の一端として、ショッピングモールの計画です。ＤＦＳ社を誘致し、国も、県も協力するということでした。市議会も特別委員会をつくり、要請をしましたが、那覇市の新都心の方へ行ってしまいました。それが返す返すも残念でたまりません。

司会　ありがとうございました。最後に伊佐敏男議長にお願いいたします。伊佐敏男議長は、平成２年に初当選され、四期10年を迎え、現在、19代議長として、奮闘中でございます。

先輩諸侯の前で多少緊張気味だとは思いますが、これまでの議員として、また議会活動を通じて、印象に残っていることと近況をお話いただきたいと思います。

伊佐敏男氏　天久嘉栄さんや伊佐雅仁さんと重なりますが、ＳＡＣＯ合意の問題です。普天間が世界で一番危険な飛行場であること、県内移設問題で市民の安全を考えて議決したときの天久さんの胸中はいかばかりだっただろうかと思います。あの時の傍聴席はいっぱいで、議員もみな緊張していました。また、宜野湾市の西海岸の開発の件では、ＤＦＳ社など視察をし、当時の市長もがんばっている最中に、9.11の米国での同時多発テロが起き、それまでの傾向を二分しました。いろいろ進めましたがうまくいかず、ＤＦＳ社は、今年３月より那覇市新都心にオープンしました。

また、去年の８月には、懸念していた事故が起こりました。国際大学にヘリが墜落、不幸中の幸いで人的被害の惨事はまぬがれましたが、市議会議長としていろいろと、手を尽くし抗議、市民集会、要請などを行ってきました。国の意識が変わってきてい

ると感じています。市民のために普天間基地を早期に返還移設し、また、跡地利用に関しては国が力を入れてもらわねばならないと思っているところです。

市昇格について

司会　ありがとうございました。これからは座談会項目に沿って進めてまいります。私どもの宜野湾市は、今から42年前に仲村春勝村長の下で昭和37年7月1日に市制が施行され、市内各地において提灯行列、芸能大会、児童生徒による旗行列、闘牛大会など多彩な催し物が行われたようでありますが、市昇格にまつわるお話をお聞かせ願いたいと思います。

石川仁一氏　その時は人口が３万人余になっていました。現在は８万人余。市に昇格したおかげで、人口も増え、宜野湾市が栄えてきたのはよかったと思っていますよ。

伊佐吉秀氏　商業と農業のバランスが当時は良かったと思う。市昇格のお祝いは、予算もたっぷりつけてあった。大山地区ではプラカードと提灯で区内を行列した覚えがありますね。

仲村春信氏　当時、私は役所にいて、市昇格のお祝いは普天間のグラウンドで行いました。市長が、かぎやで風を踊ったと思います。空手や棒術もあり、見応えのある式典でした。あの当時は施設がなく、運動場の広場でやりました。

祖国復帰について

司会　ありがとうございました。昭和47年５月15日に27年間の米国の施政権下から解放され、祖国復帰を果たしました。日本国憲法の下での諸制度に対応すべく行政サイドにおいては、部設置による機構改革が実施されております。その中でも、通貨交換においては、交換レートを変動相場制により行うとの米国大統領の表明により、県民に大きな不安を与えました。本市議会においても１ドル対360円の交換実施と差損補償を求める決議がなされております。日本復帰という大きな転換期における復帰会議での出来事、祖国復帰にまつわる思い出話など、ございましたらお聞かせ下さい。

伊佐雅仁氏　復帰についてはさきほど、保革の対立の話がありましたが、私が当選した復帰２年前には復帰賛成と反対とに二分されていましたね。「復帰すると経済が落ち込み、いもを食べるよ、裸足にもどるよ」と言っている復帰反対派がいました。また、復帰に伴ない日本国憲法になるわけですから条例の制定、改正があり、事前調整がありました。当時の議会で古波蔵議長が水を飲みながら、条例を読み上げるだけで、質疑もなにもなかったと覚えています。本会議でも、読み上げただけで、たぶん1,000件に近い読み上げの件数があったと思います。

仲村春信氏　あの時一番違ったのは、社会福祉事務所が沖縄にはなかったので、社会福祉事務所を法律によって設置するというので、本土へいって法律の勉強をしたことだと思います。もう一つは農地法。復帰前とは、法律がまったく違うので本土に研修を受けにいった覚えがあります。

伊佐雅仁氏　そういえば、市の職員も大量に採用したし、給食センターの運営管理も市の方へ移ったんだったよね。

仲村春信氏　職員も保母も大量採用で、今はその人達が定年を迎える頃ですよ。

伊佐雅仁氏　退職手当組合にも那覇市と宜野湾市は自分達で対処できるということで入っていない、当時というか、少し前まではよかったかもしれないが、今ごろから大変なことになってきていますね。

石川仁一氏　昭和49年が初当選なので、議会の事はわからないが、社会一般的なものだと、ドルから円への切り替えが大変な問題でしたよ。急にアメリカの政策で305円になり、55円の差額が出て、その差損金をもらうのに預金通帳を確認させる。そして、家に隠してあるお金も差損金をとるために全部交換に出したりしてね。

　後になるが、交通方式の変更、ななさんまる（730）。復帰によって交通方式が人は右、車は左になった。議員も街頭に出てやったよ。７月29日の晩から出ていって、30日の午前６時に一斉に変更。特に思い出が強いですね。

仲村春信氏　すぐにバスがひっくり返った事故が起きましたね。歩道橋から交通方式の切り替えをみんな見にいきましたね。感覚がかわるので、事故が多発しました。慣れ親しんだ制度を変えるということは大変なことでした。

し尿処理場建設用地問題について

司会　ありがとうございました。昭和51年１月27日、し尿処理場建設用地が伊佐区に予定され、これに反対する伊佐区民多数が市役所、市長宅につめかけたために機動隊を導入するという騒ぎが起こりました。また、昭和54年12月定例会に提出された、期末手当の支給率を改正する給与条例を審議する議会の開会を実力で阻止しようとした市職労の幹部が逮捕されるという異例な事態が発生しております。警察官が導入されるという混乱の中での議会運営がなされております。このような住民運動・組合活動等とのかかわりで苦労話などをお聞かせ下さい。

石川仁一氏　し尿処理場建設にあたり、市長をはじめ、議員団で　長野県に見学に行きました。し尿処理場を見学したところ、汚かった水が飲めるほどきれいになった。とったかすは肥料に使うということでした。臭くもないので、大丈夫だと思いましたね。

しかし、沖縄に戻り、議会を開こうとしたら、開かさないという、市民が入ってきて、伏せて入ってきていた女性が足に噛みつくという珍事件も起こりました。

し尿処理場建設場所になっていた伊佐区の公民館で、長野県の処理場などのこともあわせて説明したが納得せず、後に条件闘争になりました。公民館を造ること、環境整備をするということで建設を承諾したといういきさつがありますね。

伊佐雅仁氏　し尿処理場は、ごみ処理場の問題と対になっていました。喜友名のごみ処理場でだれかが燃やし、住民が怒った。当時もごみ処理場が満杯で、ごみの行き場が無くなっていたときで、しかたなく、沖縄市の処理場にお願いをして処理できるようになったんですね。一時はごみが宜野湾市役所の玄関に置かれたこともありましたね。大変な問題でした。そういえば、伊佐区に呼ばれて、議員はひとりひとり立たされ、話をしたこともあったな。背広も破られ、後から個人個人の誹謗中傷のビラがまかれたりもしました。

し尿処理場問題の結審のとき、賛成討論をしようとしたら、引っ張られ「頭殴られるよー」といわれたこともありました。石川さんがおっしゃるとおり、後に条件闘争になり、し尿処理場ができると、環境が悪いということで財産価値が低くなるとか。また、勤労青少年センターなどの公共施設を建設をすることになりました。

石川仁一氏　長野では処理した水は川に流せるもので、あまり、きれいだったので、きれいにしすぎないようにと川下の人から陳情があったとも聞いていたんだけど・・・。それ以前の環境の問題ですよね。近くに造った下水道施設がにおうんじゃ、ね。

伊佐吉秀氏　し尿処理場の建設は、市は苦渋の選択でしたね。私は地元が大山ですので、伊佐浜とはご近所なので反対側の応援として参加しました。当時の闘争員は中堅の先生や組合員でした。前衛はその人達で、次に伊佐浜の人、それから大山と、大山は３番目にいました。

　ある時、穴を掘って突堤をつくって処理していたら、雨が降るとコーヒー水みたいなのが流れ出てきて、市長をはじめ、幹部は、マスコミに知られてはいけないと「すぐ処理するので区長で情報をおさえてくれ」といわれたこともありましたね。本当に宜野湾はさまざまな処理問題に困り果てていました。

石川仁一氏　し尿処理は、タンクローリーに集めて、いっぱいになるとあふれて、基地に流れ出したりしていたこともあります。復帰前の法律では海上投棄してもよかったのですが、その後、法律が変わり、海上投棄がダメになったんですね。

伊佐雅仁氏　伊佐浜には下水処理場があったが、それが臭くてにおったのが災いのもとであった。し尿処理場もそうなると思われるのも無理はないですね。

伊佐吉秀氏　し尿処理は、北谷や沖縄市からも車がやってくるのでルートも決められた。チリは向こうに、し尿はここにと。

期末手当の支給率改正条例の件について

伊佐雅仁氏　期末手当の支給率の改正は復帰の後遺症で出てきたものでしたね。沖縄県全体が労使の闘いになりました。復帰の前は保革の闘いだったのが期末手当の支給率カットの闘いになってしまいました。

　当局は、本土へ行くたびに、「給与を下げろ」と国からたたかれました。だれが悪いということより、制度が違う日本に復帰してからの後遺症です。復帰の賛否がそのまま、違うことでいわれました。宜野湾は急に、給与を一気にカットしたのがいけなかったのだと今考えれば思います。給与問題も急ぎすぎたのだと思いますね。市職員が逮捕されることになってしまって残念ですよ。また、し尿問題では機動隊を動員す

ることでしか騒ぎをおさえられなかったですね。

伊佐吉秀氏　議員になって２年目。期末手当のカットについて当局から、阻止されるので、それに対する予行演習があったと覚えています。

先ほど、雅仁さんが復帰による制度変更、国、県から給与の額の是正を指導されていたので宜野湾市はまず、先に走りすぎ。市長は右よりで、組合は県内でも元気な者ばかりでお互いが両極端だったんですね。逮捕者が出て、残念で仕方がありませんよ。あまりに早急すぎた、ゆっくりやればよかったですね。

石川仁一氏　与党は市長を守らないといけなかったので、市長から夜に集合がかけられたりもしましたよ。復帰の時のイデオロギーが形を変えたんでしょうか。沖縄市は期末手当の支給率カットを３年かけてゆっくりやったようです。宜野湾市は早急でしたね。それで職員が３人も逮捕されたので、他の市町村は、それを見て慎重にゆっくりでした。

基地問題について

司会　ありがとうございました。今年は、戦後60年という節目の年に当たります。その間、基地あるが故の事件、事故が数多く発生しております。その都度、議会を招集し、対応策を協議し、国、県、米軍機関に要請行動をたゆまず展開してまいりましたが、未だ、抜本的な解決には至っておらず、大きな課題として残っております。市の最重要課題でもあります基地問題についてをテーマといたします。本土要請行動、米軍の対応、議会活動、住民運動などで痛感したこと、苦心・苦労したことをお聞かせ下さい。

伊佐雅仁氏　議員になった1970年には、復帰への激論があり、二分され、それがずっと議会に持ち込まれていたのではないかと思います。当時、「抗議」という言葉を使うのがタブーで「要請決議」になりました。それについて激論を交わしたこともあった。これまで基地について、復帰についてのものでイデオロギーが常に入っていました。

防衛施設庁の補助金についても、喜友名の公民館や宜野湾公民館に対して使うか、伊佐の軍用基地からの鉄砲水が出ているのに充てることが先で、被害のない公民館が先か？

米須市長が施設局の補助金を４億円導入して被害箇所を整備して、それから沖縄の市町村の補助金の流れが変わりましたね。他の市町村も補助金を利用するようになりました。

石川仁一氏　防衛施設庁のお金を使って施設を整備するなんてダメ、不浄のお金だとする議員、当局者もいました。私は基地の迷惑料としてその補助金をとって市民に還元するべきだと賛成した口です。最初は、他の革新の市町村はもらわなかったので、もらいやすかったですが、今はみんなもらうので、もらいにくくなりました。そんな時代もあったんだなと今は感慨深く思いますね。

基地問題で考えなくてはいけないのは、基地が宜野湾市の真ん中にあり、１メートルでも、２メートルでも宜野湾から遠のいて欲しい。どこにでも早く持って行って欲しい。

跡地利用の重大な問題が山積していますが、那覇の新都心のように何十年も長くかからないように新しい政策、法律をつくってもらいたい。

伊佐吉秀氏　宜野湾市にとって戦後最大の懸案事項である普天間基地問題。以前、議員の研修が広島であり、広島に着いたとたん、ヘリが落ちたとの連絡があったときがありました。議長はそのまま、福岡へ向かい、沖縄へとんぼ返り。このとき、初めて宜野湾市議会で保革一緒に抗議をしました。こうした危険な基地を抱えているので東京への抗議行動も多く、財政への負担も大きいと思ったことがありますね。

天久嘉栄氏　先輩方もおっしゃるとおり、基地の中に宜野湾市があり、返還要請を続けている中で、昨年民間地域にヘリが落ちたのは本当に残念でたまりません。早期に基地の返還を要請し、跡地利用に費用をかけて欲しい。２年前の沖縄振興策で大規模軍用地に関して国が補てんすることになっていますので、国が財政を支援して、りっぱな街をつくってほしいと思います。

伊佐敏男氏　60億円といわれる軍用地料、現在は子供の時代にかわり、那覇のように返還されて何十年ものロスがあってから再利用ということになっては大変です。戦後60年の重さを考え、未来に託せるものでなくてはなりません。保革みんないっしょに市民のためにがんばっていきたいと思います。

宜野湾市及び市議会の活性化へ向けた提言について

司会　ありがとうございました。最後に、宜野湾市及び市議会の活性化に向けた提言、もしくは、後輩議員に望むことなど指導、助言を賜りたいと思います。

石川仁一氏　今後の宜野湾を考えるに最大は基地問題。早めに基地の跡地利用、地主の補償など対処してほしい。当局も、議会もいかに市の発展につながるかを考えて対処してほしいと願います。

伊佐吉秀氏　地方議会は野党、保守などは論議を尽くして一致点を見いだすこと。今はイデオロギーの時代は過ぎ、論議を尽くして、一致点を見いだし、当局に対しては、チェック機能、さまざまなものを提案して欲しいと思います。市町村合併についても議会は、長い目で見て宜野湾はこうあるべきと、言ってほしいですね。また、市民の声を聞き、なおいっそう努力するよう期待し、市の発展をお祈りいたします。

伊佐雅仁氏　市民が安心して暮らせるもとをつくってほしい。行政当局は安全で安心できる街づくり、経済、雇用、そして福祉の順で考えてくれたらと思います。特色ある宜野湾市づくりをしてもらいたいです。

議会は分権の時代。特色ある宜野湾市をつくるためにチェック機能をするだけでは物足りない。最初から提案もやっていけるような、そういう発想もなくてはならないと思います。地方議会であるにもかかわらず、高度なイデオロギーで対立していてはいけない。政治は妥協の産物だと思って市民のために議会活動をやってほしい。要請行動もしかりであります。

やはり、重要なのは基地の跡地開発。行政当局と地主会と議会が協力してやっていかないといけないと思いますよ。議会はもっと行動すべき。私も行動する市議会をやった、みんなと意見交換してやってほしい。今の議会は対立でなく、統一行動ができる。基地に始まり、基地に終わるという思いで、最大の課題である宜野湾市の基地の跡地利用に取り組んで頂きたいです。

天久嘉栄氏　基地に始まり、基地に終わるということです。地方分権や三位一体改革、基地問題、行政改革、健全化運営を確実にしてもらいたい。市勢の発展を祈念いたします。

伊佐敏男氏　基地問題、西海岸問題、財政などいろいろな問題があります。西海岸の発展なくしては宜野湾市の発展はない。市長がホテルの誘致で動いてきましたが、バックアップしていきたい。税収の確保等、保革一致でやっていきたいと思っています。

終わりに

司会　話は、尽きないと思いますが、時間も経過しておりますので、そろそろ座談会を閉めていきたいと思います。歴代議長の皆様には、大変貴重なご意見、当時の議会の模様などをお話いただきまして厚く御礼申し上げます。拝聴いたしました貴重なお話しは今後に活かしながら、後世に継げる議会史を作り上げたいと思います。本日は、長時間にわたり大変ありがとうございました。

前列左から　仲村春信氏、石川仁一氏、伊佐吉秀氏
後列左から　長嶺　健氏、伊佐敏男氏、伊佐雅仁氏、天久嘉栄氏

２．議会在職中の思い出

議員時代の思い出

第７、８、９代議長
古波蔵　清次郎

1962年（昭和37年）７月１日は、永代忘れることができない宜野湾村から市への昇格、記念すべき祝日となった。

それにともない市議会議員選挙が行われた。定数21人中、再選４人、残り17人は新人が選出された。私もその中にあって初めての議席であったが、議長に推挙され、浅学非才で職責に不安はあったが３ヵ年間村監査委員としての実績を生かし精一杯努力しようと就任した。その後、私は議長職を３期１２年、また、議員としては16年の長きにわたり、宜野湾市議会議員として務めることができた。

その当時、議員の方々は新しい都市像の構築に勇気と可能性を持った熱血集団となり、議場は活気に満ちていた。

まず、村制時代は、執行部の総務課長が議決機関の処理を兼務していたが、地方自治法に基づき、市議会事務局設置条例及び、議会事務局処理規程を制定した。そして議決機関として独立性の堅持と運営の近代化を図った。

また、役所職員の意識改革と刷新には市長の職責追及より、むしろ処遇を改善し、積極的な渉外活動の展開により執行体制の活性化を促すことが得策であり、市長を行政に専念させるのが議会の役割であるとの認識から、市長専用車の購入と専属運転手の配置を全体協議会において満場一致の決定となったこともよく覚えている。

市に昇格し、発展途上にある半面、交通事故が増加の傾向にあった。市民も交通事故に対する関心も高く、「交通安全母の会」から「交通安全都市宣言」などの要請もあった。議会では要請決議が採択されたが、類似の施策が他市町村にもあるため、新市にあうようなものにしようと、そのとき本土視察研修議員団の調査項目に加えるよう議員から申し出があり、追加処置がとられた。その後、先進地調査等の結果、交通安全も含めた「市の健康を阻害する一切の除去」を目標とした「健康都市宣言」がふさわしいと判断し、議会で詳細に検討し、新生宜野湾市にふさわしいものとして、当局に実現方の要請を行い、1964年７月１日、「健康都市宣言」、「健康都市建設市民の誓い」の決議がなされた。

議会活動においては、さまざまな政党に所属する議員や区の代表としての議員など

がいてなかなか意思統一ができなかった。喧々諤々意見を戦わせるのはいいが意見を譲らず、白熱しすぎるきらいがあった。それでは議会運営がままならない。「みんなで市政のことを考えよう」ということで議員クラブという組織をつくり、市政に反映させようと考え、議会に限って活動を行った。また、費用などは自己負担、利用するのは島内産業育成と島産品愛用を原則とするなど提言があり、議員の賛同を得て行われた。全員参加の親睦会のようなものであり、議員クラブの活動のなかで白熱した議論、珍プレーや面白いエピソードも生まれた。当時、キャラウェイ旋風が巻き起こり、市民は生活の基盤づくりでやっとのときであり、われわれ議員は将来への大きなヴィジョンを掲げて必死で取り組んだ時代であった。

現在、そして今後の市議会議員にも、議会活動においては十分なる調査、研究を行った上、切磋琢磨して、宜野湾市発展のために精進していただくよう祈念するものである。

思い出すままに

第10代議長
武　島　行　男

昭和37年９月宜野湾市議会議員最初の議員として当選、市議会第一期議員となる。大きな市の歴史転換期である戦後17年続く米軍支配下で色々制約はあったものの日政援助が漸く動き出し、戦後復興の槌音が賑やかになり始めた頃である。

流れは急で緊張の連続であったと記憶している。将来に向かっての諸々の計画の策定、当面の問題処理と多忙を極めた時代でもあった。議会委員会構成で経工委員となり、委員長拝命、最初の仕事が都市計画マスタープランの草案策定の重責を負う、資料集め情報収集、漸くプランに着手と言う時点で関係課長の交替、落ち着いて仕事ができると思った矢先、三ヶ月程で課長が県へ転勤とゴタゴタが続き、どれ程時間のロスがあっただろうか。落ち着かない時期の長かった事、落ち着いて項目別の話に着いたのは二年を経過しての事であった。都市計画で最初の議論は道路幅員の件、広過ぎる意見続出、旧県道との比較、将来の話に及ぶと夢の見すぎとなじられる始末、納得合意迄の苦労は並のものでは無かった。

海洋埋立についてＫ課長が示した図上には僅かな面積なのに「夢は大きく持とうリーフの上全体を計画する様に」と申し入れたら「貴方は物を思わない。一体どれ程の面積になるか、その費用は」と言う。「一度に全体を埋めるのでは無い予定だから」と強要したら不承無承でやっとOK、今現地の状況を見たら何と言うだろう。過日、娘の車で牧港川を横断、伊佐浜迄の道路を快走し感無量。後を継いで呉れた皆様が斯様に立派に仕上げつつある現況に未来を想像し、感謝すると同時に自分の夢が叶えられる満足感に酔った一時だった。

物事すべて順調にいくものでは無い。伊佐浜し尿処理場の建設は地域住民の反対運動の矢面に立たされ任期中の最大の思い出となった。事の発端は沖縄市・宜野湾市・北谷村（当時）の二市一村による一部事務組合を設立し、ゴミ処理施設を沖縄市に、し尿処理施設を宜野湾市に建設する内容で合意し、その実現は急を要するものであった。従来海洋投棄で処理されたし尿が、海洋汚染防止法が強化され投棄処理が不可能になる法施行前に施設を完成させねばならず、その実現に向けて当局と一体となり努力したものである。ところで、かねて予測した住民の建設反対運動は予想を遥かに超えた激しいものとなり、一時期失敗するのではと危惧する程に燃え上がったものだっ

た。議員全員と住民との対話集会を開き、深夜に及ぶ熱気と怒号の中で行われ、一部議員に動揺が見られ、事の成り行きに不安さえ覚えた程である。反対の理由は既に建設運用されている県下水道公社の処理施設が周囲に臭気を放散、地域のイメージダウンになっている。更に同様な施設が出来、し尿処理運搬車の通行が日中走り廻ったらどうなるかと言うのが主な反対理由であった。執行当局、議会ともに頻繁に会合を開き局面打開に努力したものの、燃え上がった住民運動は治まる気配も無く苦悩の日々は続き、二市一村の議決期日は迫り、いよいよ決断せねばならぬ時は来た。早朝より地域の人々は終結、議場入り口を人垣で封鎖し議員の入場は阻止される状況となり、最後の手段として不本意ながら警察機動隊の導入となった。隊員の誘導で入場となったのであるが、怒りに満ち群集の罵声と抵抗は激しく満面憎しみを込めて睨みつけ、力一杯太股をねじった中年女性の顔は今思い出してもぞっとする。嵐の議会は曲折の中に終了、其後処理施設の完成迄には多少の困難はあったものの当局の並々ならぬ努力で無事完成を見、今日に及んでいます。

さて二十余年の議会の思い出の一端を述べたものの表現不足で要領を得ず心残りが致します。

終りに臨んで老いたる者の夢と希望を申し上げ筆を置きたいと思います。

申す迄も無く、本市の今後の発展は市の中央を占める広大な基地の開放以外無く、戦後五十余年も存在し、尚今後幾年存在するかもしれない現状を苦々しく思ってなりません。せめて存命中にその行途を見届け度い、市の未来像を思い描き度い、願わくば当局・議会一丸となって寸時も速く解決に向けて奮闘される様強く期待し、限りなき市の発展を祈念し終わりにします。

議員時代の思い出

第12、13代議長
石　川　仁　一

議長あるいは議員時代に一番に記憶に残っているのは、宜野湾市立体育館のこけら落としのイベント問題である。宜野湾市立体育館完成でこけら落としでキューバ対全日本のバレーボールの試合をやらないかと県体育協会から打診があった。それはいいということで、キューバ対全日本の試合を開催することに議会で可決したが、予想外に外務省が許可しなかったのである。米軍基地があるので、敵対するキューバを招く訳にはいかないというのが理由であった。基地があるゆえに親善試合もままならないとは・・。

議会では「基地があるためにこういうことになったのだ、基地撤去を叫ぼうじゃないか」ということで総勢10人の議員で外務省に陳情に出かけた。県出身の議員のさまざまなコネクションを駆使し、直接大臣に面会することができた。当時は阿部外務大臣であったが、意気盛んだった私達議員団の訴えを聞き入れ、あるいは基地早期撤去の世論が大きくなるのを政治的に心配したのか、キューバ対日本のバレーボール親善試合は、当初の計画通り宜野湾市立体育館のこけら落としのイベントとして無事開催された。基地がない市町村なら何の問題もないことである。こんなところにまで基地被害ともいえることが常に背中合わせで起こっていた。

基地被害といえば、こんなことがあった。真栄原十字路からかつてのキングスクールには、雨が降るとすごい水が溜まった。地形的なこともあるが、基地からの水が流れてきた。雨が降るたびに防衛施設庁は基地被害として補償金を払っていた。少しづつ払ってもらうお金では根本的な改善は望めなかった。それをまとめて根本的な改修ができるよう議会で決め、その資金をだし、工事に取り掛かるよう陳情にいった。３億９千万円というお金で真栄原排水幹線の工事を行うことができるようになった。地域の切なる願いであった環境整備が叶い喜んでもらえたことはうれしかったことである。

また、議長在職中に特に力を注いだのは海邦国体である。国体開催の７年前に話があった。当時、そこは海であった。海に向かってここでやりますといった記憶がある。国体主会場は泡瀬に決まってしまったが、後にコンベンションセンターができた。余談であるが当時、ジミーのコマーシャルに大洋ホエールズ（現横浜ベイスターズ）の

古葉監督が出演していた。ある料理屋でジミー社長の稲嶺さんが宜野湾をキャンプ地としてどうかという話を持ち出し、宜野湾市長、議長の私も同席しており、「それはいい」ということで稲嶺氏が古葉監督などへ話をつないでくれ、話がまとまった。それから雨天練習場、ホテルなどがあればなおさら、地元への波及効果があるだろうと造られていった。現在のコンベンションエリアとして発展した西海岸埋め立て地の礎のときであったと思う。それにしても、酒宴のときであったがあの宜野湾の発展を願っての一言がここまで動き、実ったことは思い出すたびに感慨深いものがある。

海邦国体当時は、成功に向けて、当局、議員、事務局員が一致協力して取り組んでくれた。議長として大変うれしく感謝している。また、議長任期も県や国とのつながりがあるのでと海邦国体終了までと、異例だが２期半に渡って私を推挙してくれた。そのおかげで悔いなく、議長職の責務を無事に果たし、終えることが出来た。現在は、現役を引退したが老人会で活動をしている。私達の宜野湾市の発展を若い力で作りあげていって欲しいと切に願うばかりである。

在職中の思い出

第14代議長
伊　佐　吉　秀

私が議員在職中、一番に印象に残っているのは平成元年の６月定例会でのことです。当時、私は第14代議長をおおせつかり、議会運営に当たっていましたが、その事件は、ある議員の質問を機に、発言の内容を撤回してほしいなどのやり取りから始まりました。だんだんと与野党議員の間で互いに不信感がつのり、あろうことか、議決の時に総員退場という事態になり、おかげで補正予算案が廃案になってしまいました。予算が議決されず、執行できないとなると、最終的なしわ寄せは市民生活に響きます。予算案に問題があったわけではなかったのです。私は議長として、いろいろと手をつくしましたが、このような事態になり、議長席から宜野湾市民にお詫びをするということにまでなってしまいました。

それから急いで、当局は、臨時議会を開催し、補正予算を通したという経緯があります。夜12時まで各会派の会長会議まで行たりと、議長としては四苦八苦でした。

長年、宜野湾市議会議員は議場においてはまさに泡を飛ばし、侃侃諤諤と議論を戦わす仲ですが、いったん、議会を離れると、党派を超えて、新年会・忘年会など仲良く酒などを酌み交わし、市民のために働く同僚といった感じでした。しかし、そのときばかりは違っていました。前代未聞のできごとでしたね。主義主張や理屈でなく、意見の食い違い、心のすれ違いが起こしたものでした。私をはじめ、議員や運営にあたった議会事務局、当局など、理想的な民主主義とは違う稚拙のような事態を目の当たりして、現実の議会運営の難しさをその時ほど痛感したことはありませんでした。

普天間基地を抱える宜野湾市議会にとって基地のことについてもいろいろありました。昭和57年広島県に研修中、米軍ヘリが墜落し、当時の又吉正弘議長が大急ぎで帰沖するということもありました。この時に、普天間基地の撤去を持ち出したと思います。保守と革新が初めて柔軟なかたちになり、意見が一致したのではないかと思います。その当時（昭和55年ごろ）は普天間基地撤去など、なかなか打ち出せない世界情勢でした。その後、平成２年６月に、普天間基地早期返還に関する要請決議を行い、国と県に対しても早期返還を要請しました。表題に初めて「普天間基地早期返還」と出たと思います。

私が議長に就任したのは、昭和63年でした。就任にあたり、公平な議会運営、中立

を期したいということ。また、当局に対してチェック機関としての機能を高めていきたいと思っていましたので、すでに公的な勉強会などもありましたが、各会派の勉強会や研修を奨励しました。さまざまな出来事がありましたが、そうした姿勢で臨んだことにより、みんなよく勉強し、議員としてますます磨きがかかったような気がしました。

議員在職中の思い出

第15代議長
仲　村　春　信

私は1970年、地域の方々からの強い推薦があり、議員に立候補し、当選いたしましたが、議員に立候補したとき、議員の一番の仕事は市民への奉仕であることを心に刻んだ思いがあります。当然といえば当然ですが忘れがちですからね。当時沖縄には社会福祉事務所などはなく、日本復帰を控え、行政を含めた過渡期に当たり、そのため東京へ研修に出かけた記憶があります。

議会議長になったときに議会の運営は大切であることはもちろんのこと、議長として市の提案する議案を正当に評価できるような議会、議員の環境づくりを心がけました。そして議長の職務に関するいっさいの勉強をしたつもりであります。当時は議会事務局長が議会に対して未経験の方とのスタートでしたので、事務局も苦労が多かったと思いますが、よくやっていただきました。また、議長である私は議会に対しての全責任を負っていますので、議会運営に関して議場が紛糾したら休憩し、中立を堅持しました。議員の対立した意見へは口をはさまず、思う存分議論していただきました。しかし、言うべきときにはしっかりと言い、意見をまとめていました。なかなかまとまらないときには、各会派の長と調整を行うのもしばしばでした。

特に記憶に残るのは、平成６年４月に普天間基地内でヘリコプターが墜落した事故でした。一歩間違えば、隣接している民間を巻き添えにする大惨事になる可能性がありました。それですぐに議会で抗議を議決し、東京のアメリカ大使館などに５人で出かけました。緊急でしたが仲村正治議員に労をとっていただき、羽田外務大臣に直接意見書を持って要請し、アメリカ大使館では抗議を行いました。わりと平身低頭でこちらの抗議をちゃんと聞いてくれたことが意外でした。

また、市議会で宜野湾市の県議会議員の定数を２人から３人にするという要請決議を行いました。そのことで議長職にあった私は、県議会に参考人として呼ばれたことがあります。定数を増やしたい理由を聞きたいとのことでしたので、「人口に比例して議員人数も割り当てされるはずじゃないか」ということを述べました。県議会での一票の重さは大切なものです。もちろん、その後定数は２人から３人となりました。

さらに、現在の宜野湾中学校の設置に向けては、予定用地の地権者に対して了解をもらうべく、何度となく訪問し話し合いをいたしました。学校が完成したときは、地

域の方々とともに非常に喜びました。

中国の厦門市との姉妹都市提携に際しての厦門での歓迎、ハワイ移民事業90周年におけるハワイ訪問など思い起こせば、いろいろなことがありました。議長職４年、副議長４年、議員８年の計16年の議員在職でした。いたらないところもあったかもしれませんが、議長職時代の議会運営はみんなが党派を超えて協力してくれたので、おおむねうまくいったのではないかと、自負しています。

行政・議会は市民のためにあるものだとつねづね思っていますが、現在の議員は質が高く、高学歴で教養もあると見受けられます。それぞれに一生懸命にやっているものだと思いますが、これからも常に市政は市民のためにあるものだと肝に銘じて、市民のためにやってもらいたいと思っています。

私の思い出

第16代議長
伊　佐　雅　仁

思えば祖国復帰を間近に控えて、世相は混沌として、政治的には日米安保条約に象徴される国策の下で、常に米軍基地問題に煩されて来たさまざまな事が、走馬灯のように去来するのを覚えます。私は1970年に初当選以来、７期28年間市議会議員を務めさせて頂きました。その間に種々の役職を経験しましたが、中でも特に忘れられない思い出は、市庁舎建設特別委員長と議長の職務であります。

まず、昭和52年３月庁舎建設の議案が提案されました。内容は市の将来人口を十万人と想定した面積の確保と、建設場所の移転を前提にした計画でありました。議会は特別委員会を設置して審議することになりましたが、建設場所の移転は、市民の利害が絡み審議は難航するであろうとの思惑から、委員長のなり手がなく、責任与党の立場上やむを得ずその役目を受けることになりました。私はそのとき、この審議は長引けば雑音が入り難航必至と想定して、集中審議で短期間に結審しようと、腹を決めて臨むことにしました。案の定審議が始まると議論は入口から建設場所に集中し、移転反対の意見が続出しました。内容は①現在地で面積の確保は可能である。②役所の移転は周辺の経済が衰退する③58号線沿いは交通が不便になる、従って新庁舎建設は、現在地か普天間神宮裏若しくは市民駐車場にすべきと主張しました。私はこの問題の解決策は、消去法で行くしかないと判断して、当局に対し、問題ごとに解明して早急に答えを出すよう進言しました。この件に対して当局は①現在地は狭隘で十分な市民サービスを行う面積の確保は不可能②跡地は公共施設等配置した開発を行って活性化を図る③市内一周バスの運行を確約する、普天間神宮と市民駐車場については、米軍と折衝の結果、両方とも基地機能に支障をきたすとの理由で、不可能であることが明確にされました。このように問題は整理され、審議はようやく具体的内容に入り進展しました。そのとき周辺から移転に反対する署名活動の動きがあるとの情報が寄せられ、緊張した場面もありましたが、委員各位のご協力により慎重に審議されて、付託から46日間の短期間で、無事結審できたことは忘れられない思い出の一つです。

それから普天間飛行場返還要請行動があります。私は1995年９月議長就任と同時に「行動する市議会」を宣言し、市政にとって長年の懸案事項であった、普天間飛行場の返還要請行動を議会に提案したところ、全会一致で承認され、早速行動することに

なりました。市民の意見を聴取するため、軍用土地等地主会、市商工会、自治会長会、市婦団協等と意見交換を行い、これを踏まえて、飛行場の早期返還、跡地開発の財政支援、地主保障、雇用の確保を内容とした要請決議を行い、決議文は衆参全国会議員に送付しました。同時に県当局はじめ、県内に所在する政府関係機関への要請を経て、更に中央の要請行動に移りました。1995年10月首相官邸はじめ、外務省、防衛施設庁長官、大蔵大臣、沖縄開発庁長官及び県選出の全議員に要請を行い、所期の目的は終了しました。当初はこのような要請には、国会議員の同伴がなければ、首相官邸や大臣との面談はできない、人数も７人に限定すると連絡を受け内心苦悩しましたが、故人となられた宮里松正先生の特段のご配慮によって、基地関係特別委員17人全員がテーブルに付き、要請の効果を発揮することができました。特に今回の要請行動は、県下の自治体議会で初めての取り組みで、しかも大型の要請団とあって、政府は真剣に耳を傾け、マスコミは注目して全国発信した効果は、大きいものがあったと思います。その後６カ月経過した1996年４月12日、橋本首相とモンデール駐日大使によって、５年～７年以内に普天間飛行場を返還する合意が発表されました。議会は直ちに対応し、返還合意のお礼と財政支援、地主保障、雇用の確保等を内容とした決議も行い、再度の要請を行うことになりました。1995年５月故宮里松正先生と上原康助先生のお力添えを頂いて、前回同様首相官邸はじめ、関係各大臣に要請を行いました。以来７年経過した今日、事態の進展は見られず、危惧の念を抱きつつ、返還要請行動に情熱を燃やした、当時のことを思い出しているところです。

その他紙面の都合で詳しく記すことはできませんが、復帰前の三市村合併と養鰻事業の失敗や、し尿処理施設建設と職員給与改定を審議する議会に、二度も警察機動隊が導入され、三人の市職員が逮捕された混乱もありました。一方沖縄国際大学はじめ、沖縄コンベンションセンター等多くの企業誘致を図り、市勢発展の基礎を築いた時代でもありました。今振り返って見れば、特に米軍基地にかかわる問題が続発し、その対応に奔走させられた、まさに激動する時代の議会だった数々の思い出が残っております。

議会活動を振り返って

第18代議長
天　久　嘉　栄

この度、長年の懸案事項でありました「宜野湾市議会史」が発刊の運びとなりましたことを心よりお祝い申し上げます。

さて、「議会活動を振り返って」とのことでありますが、まず初めに脳裏に浮かぶのが第17代議長の佐喜眞博氏のことである。彼は、公務先で急に気分が悪くなり入院し、快気の願いもむなしく、平成11年３月定例会の最終日に急逝されたとの連絡があり、私も副議長、また同僚として断腸の思いでありました。

なお、市議会としては、御冥福をお祈りし、黙祷を捧げ、49日の法要を済ませるまでは喪に服した上、後日、正副議長の選挙を行いました。その結果、私が第18代議長に当選いたしました。就任に当たっては、西海岸地域の開発、普天間基地の移設に取り組むと心を新たにしました。

一番の思い出は、４カ月後の臨時議会（平成11年８月21日）において、普天間飛行場移設先早期決定に関する要請決議をしたことです。各会派調整を行ってもなかなかまとまらず、一番の問題は日米特別行動委員会の合意事項を入れるかどうかでしたが、私としては「早急に基地を撤去し、跡地開発しないと宜野湾の未来はない」と思っておりましたので、絶対に決議をしないといけないという信念を深めていました。

午前10時から夜の11時まで調整をしましたが、議会はなかなか前に進まず、とうとう午前０時前になり、延会手続きをとらなければ決議案が流れてしまうというところまできてしまいました。そこで、議会の会期を１日間延長し、延会手続きをとった上で、午前0時30分から深夜議会を開いて採決を行うことにしました。実は各会派間で事前に話し合い、賛成過半数以上で議決できるはずでした。ところがいざ、ふたを開けて採決すると、15対15の可否同数になり、議長判断になったのです。通常ですと、意見がまっぷたつに分かれている場合は、決議を通さないのが慣例でした。しかし、私は宜野湾市の未来を考えると、どうしても決議しなければいけなかったのです。基地の移設決議をしないということは、いつ何時、基地があるために宜野湾市民が犠牲になるか、基地を撤去し、開発することが、宜野湾市民にとって大きな利益になるのだという思いひとつでした。

議長裁決に当たり、賛成として決議いたしましたが、背広を引っ張られたり、乱闘

騒ぎになりかねない状態で、「苦渋の決断」をした日でありました。議長である私が賛成にまわったので、多くのマスコミに囲まれてものすごい質問攻めにあいました。また、この８月議会は、宜野湾市議会はじまって以来の傍聴希望者が列をなし、整理券を発行するほどで、傍聴者の30名は抽選で決めたものです。マスコミは、本土各社も駆けつけ、しかも傍聴席からは、議長に対するヤジもすごいものがありました。それから毎日のように、議長室においてはもちろんのこと、自宅でも抗議されることで明け暮れました。ちょうど普天間飛行場移設が、平成８年４月に５～７年で返還するということで合意されてから３年目、大きな節目の議会になりました。

当時はいろいろ非難も浴びましたが、このことは、「これからの世論あるいは時代が判断するのだ」と、強く思っていました。

それからもう一点は、宜野湾市の西海岸開発の一環として、沖縄国際ショッピングモール建設計画がありました。沖縄振興特別措置法において、空港域外免税店を宜野湾市と指定され、国も県も協力するというので、ＤＦＳ社という免税店をメインにさまざまな企業を誘致し、開発するはずでした。議会でも誘致決議し、代表で政府と県に要請行動も行い、感触はかなりよかったのですが、結果的にＤＦＳ社は那覇市の新都心に進出することになってしまいました。それは、他の企業誘致がうまくいかなかったことなど、さまざまな問題点があり、本当に宜野湾市にとっては残念なことでした。

終わりに当たり、今後の市議会及び本市の発展はもちろん、普天間基地の返還、跡地開発をはじめ、西海岸地域の開発等により、ますます市民の皆様が幸せとなることを願ってやみません。

議員在職中の思い出

叙勲受賞者
宮　里　敏　行

私は戦後、1957年から一年間、大山区長を務め、その翌年の村議会議員選挙には自治会の推薦により立候補して議員になりました。二期目には、副議長に就任しました。その当時の社会状況というと、通貨はＢ円からドルへの切り替えがあり、戦前を踏襲した戸主制度から、新しい住民登録制度が施行されました。

議員になってびっくりしたのは、執行部の職員が議会の事務局はもちろん、諸業務を兼ねていたことです。たとえば、議案の起案の仕方など昭和32年頃までは議員側で起案しその後、相談、調整して執行部が提案するようにしたいきさつがあります。

その頃はまだまだ、基盤整備が整わず、宜野湾村（当時）内を開墾したからということで、補助金をあげていました。また、ねずみが作物を食い荒らすので、ねずみの尻尾を多く集めた人は表彰されるという時代でした。こういうことを目の当たりにし、基盤整備の不備をどうにかしなければならないと強く感じました。

その後、本土へ研修に出かけ、規則、規定などを学び、その制定などを行ったことは強く脳裏に焼きついています。それまでは、法律による規則、規定ではなく、前例のみに重きをおくようなものであったのです。この頃、稚拙であった議会の骨子を一つひとつ、骨のあるものにしていった感があります。

当時の議員というのは、本当に名誉職で、一家の長である私の給料は微々たるものでした。私事でいうならば、教職をする妻の働きがないことにはなりたたないばかりか、終戦からの生活基盤整備など仕事は山積し、付き合いも多く、持ち出しということも多くありました。ですから、議員はもちろん、公務員もなり手がなく、不足していました。米軍は基地を拡大し、居住する米軍関係者やその家族にかかる仕事が多くあり、給料や待遇も良く、基地関係の職場で働く人の方が実入りもよかったのです。給料以外に、戦果といって、基地内からわずかづつながら勝手に物資をもらってくるのが黙認されていました。それで家族の生活を幾分か潤せたのです。

生活もままならない時代、のちに、議員や公務員の給料も、生活できる程度の額に改善するように働きかけました。その後、改善されていきましたが、それは、私が議員を退いて後からのことだったと思います。

こうしたことをつづっていますと、私が在職した当時は、戦後まもなくのことで、

生活もゼロからのスタート、もちろん、議会も基盤固めのときで民主議会の草創期であったのだと、今、つくづく思うところです。

私は市議会議員として、昭和33年から４期16年間、その間３期12年は、副議長の要職を務めさせていただきました。

この度、平成16年の春の叙勲において、旭日双光章を受章することができましたが、これもひとえに、当時の同僚議員や関係各位の御指導、御協力があってのたまものと、改めて衷心より感謝申し上げます。

結びに当たり、宜野湾市のさらなる発展のため、市当局及び市議会議員並びに関係各位のますますの御尽力をお願い致します。

宜野湾市議会 在職中の思い出

知　念　忠　二
（1973～2002年）

いつの時代もごみの問題は、市民にとって切実であり避けてとおれない大事なこと柄です。私が1973（昭和48）年７月市議補欠選挙で初当選したときの目玉政策の一つは「ごみ回収料を無料にします」でしたが、有権者の反応にびっくりしたものです。

「物価値上がりの激しい時勢にチリ代くらい無料にしてほしい」というのが市民共通の願いだったからです。

直後の12月市議会定例会は、私を含む各議員から提起されたごみ回収無料化問題で大論議になりました。市当局も「ごみ回収は、地方自治体固有の業務であり、無料にしてこそ責任が果たせる」と部長はじめ事務段階が意欲的な態度で臨み、「この方向に進めていきたい」と市長が答弁、無料化が確定的になったのでした。

市当局は、翌年の３月定例会に米須清与市長自ら「健康都市宣言をしているたて前から無料化に踏みきった」と説明、条例改正案を提案したのです。

議会では、白熱した議論の末、全会一致で条例改正と関連経費を計上した一般会計予算を可決、ごみ回収無料化実現の運びとなったのでした。

まず私は、この問題で発揮した市当局の熱意及び議会の立場を超えた対応と理解に感激したものです。

次の試練は、ごみ処理場の確保問題でした。喜友名区東側の露天焼き処理場は、区民との約束で1974年６月30日閉鎖、一般家庭ごみが二週間もストップする事態に…。

沖縄、宜野湾両市長の合意による沖縄市内処理場の暫定使用も市民の阻止にあい、75年６月30日で終結。市当局は、やむなく不法処理を承知のうえで処理場を沖縄本島南部に確保、ごみを10トン車に積み替え上からほろをかぶせ、人目を避けて搬入したのでした。

この手段も先方住民に見破られ、６か月間で終わりになったのです。

そこで「ごみ処理に困る宜野湾市」「し尿処理に困る沖縄市」という困ったものどうしの両首脳が話し合い、「沖縄市が計画するし尿処理施設を宜野湾市で建設することを条件に、宜野湾市のごみを将来永久に沖縄市の処理場で処理する」との合意に達したのです。

つまり現在の伊佐伊利原のし尿処理場、沖縄市倉敷のごみ焼却施設を管理する沖縄、

宜野湾、北谷の三市町が運営する倉浜衛生施設組合の原型となるものです。

しかしこれを実現する過程は、容易ではなく困難そのものでした。地元伊佐区の合意が得られないまま、市当局は、1975年９月26日「ごみ、し尿問題を解決する千載一遇の好機」ととらえ、施設建設費補助金申請との関連もあり「これ以上待てない」として議会に「し尿処理場の設置について」の諮問を提出したのでした。

議会では、反対する住民に包囲された状況のもと連日賛否双方の激論がくり広げられました。その結果９月30日圧倒的多数で諮問を可決、答申したのです。私が一貫して賛成の立場に立って質問、採決に際しても唯一賛成討論を行なったことにより、反対側住民から激しい抗議の電話と百通を越す抗議書を送りつけられたことはいまだ記憶に新しい。

でも最終的には、市当局と地元住民がねばり強い交渉を重ね、どっちの立場も損なうことなく問題を円満に解決したことを非常に嬉しく思いました。

またごみ、し尿処理問題の一挙解決の好機に際し発揮された議会の良識にも感慨深いものがあります。

復帰直前直後に展開された市当局、市議会、各種団体等市民あげての米海軍Ｐ３Ｃ対潜哨戒機の普天間基地移駐・飛来反対闘争も印象深いものです。議会は、1972年３月、73年10月、同12月の三回に及ぶ反対・抗議決議を採択。議会も加盟する「命を守る会」〈会長は市長〉では、73年12月大山小学校校庭で抗議大会を開催しましたが、議会の弁士は「一番新しい議員」として古波蔵清次郎議長の指名で私が意見発表、身の引き締まる思いをしたものです。

75年２月25日白昼、下校中の女子中学生が野嵩、新城間の「黙認耕作地」内通路で米兵に襲われるという婦女暴行未遂事件が発生。前年11月には、普天間第二小の女生徒が米兵により付近の路上でセクハラ。その二年前には、若い女性が「黙認耕作地」で米兵に婦女暴行されるという凶悪事件が相次いで発生していました。

私は、こうした事件を質問で明らかにしたものとして議会に抗議決議案を提出しましたが、75年３月31日定例会本会議は、全会一致「米兵による女子中学生婦女暴行未遂事件に対する抗議決議」を採択、犯人の厳罰、綱紀の粛清と併せて「諸悪の根源となっている普天間基地の撤去」を強く要求しました。

以来普天間基地に関する事件、事故（飛行機墜落等）が何十回となく発生、そのたびごとに議会では抗議決議し、撤去を要求。特に95年９月18日採択の「米軍基地普天間飛行場の早期返還等に関する要請決議」は、画期的ですが、返還がいまだ実現していないのは残念です。早期返還を強く願わずにはいられません。